

氏名(本籍)	ひらのてつや 平野哲也(栃木県)
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博乙第1894号
学位授与年月日	平成15年1月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	生命環境科学研究科
学位論文題目	江戸時代における村社会の存立構造 —北関東主穀生産地帯を中心に—
主査	筑波大学教授 農学博士 佐藤常雄
副査	筑波大学教授 農学博士 永木正和
副査	筑波大学教授 理学博士 石井英也
副査	筑波大学助教授 博士(農学) 加藤衛拓

論文の内容の要旨

本研究は、江戸時代の村を百姓の結合がつくりあげた社会組織と捉え、百姓の生産・生活にかかわる村の営み、百姓間の諸関係の分析を通して、江戸時代における村社会の存立構造を考察した。対象地域としては、これまでの研究史において、農村荒廃(百姓の貧窮化、村社会の疲弊)の悪循環構造が析出されてきた北関東の主穀生産地帯である下野国芳賀郡を対象とした。その結果、以下の4点を解明した。

- (1) 江戸時代の芳賀郡では、村方地主を先頭に米穀市場と深く関わった百姓の営みが主穀生産地帯という地域的個性を生み出した。芳賀郡の百姓は、自然環境や江戸に直結する市場条件・輸送条件など地の利を生かして、主体的な判断・行動によって米穀を生活の糧とし、生産力の安定・向上と販売の拡大に励み、市場変化に機敏に対応する資質・能力を磨いていった。
- (2) 百姓は、販売・購入・労働・土地市場のバランスを見極めながら自らの生業を積極的に変化させた。18世紀中期～19世紀前半は百姓が極貧化・没落した農村荒廃期と理解されるが、それは生計の比重を諸稼ぎに移そうとする百姓が戦略的に行った離農・離村や耕作放棄の結果であり、むしろ、百姓の生活力のたくましさ、生業の多様と選択が顕著にみられた時期とみなされる。
- (3) 百姓や村は地域資源を効率的かつ有効に活用する主体であった。村には耕地や山・川などの資源があり、百姓は、時代状況に応じて、そこから多様な価値・商品を生み出し、暮らしに役立ててきた。百姓や村にとっては資金や労働力、情報や農法までもが資源であり、それらを結びつけることで地域経済・村経済を安定・活性化させていた。その際、資金や情報・信用力をもち、労働力を編成し、地域的ネットワークに乗せて諸資源を循環させ、地域と市場をつないだのが村方地主である。
- (4) 江戸時代の村は、構成員たる百姓家の協同のうえに存立し、百姓家の合意に基づいて運営される社会組織であった。村社会は多様な側面から百姓家を支援し、百姓間の浮沈・競争の激化による社会矛盾を緩和・改善するための仕組みと機能を兼ね備えていた。村として豊かさを追及し、そのための方策を打ち出し、実践する積極的な組織体でもあった。江戸時代の村に存在した村役人と小前百姓、地主と小作人、前地主と前地などの経済関係・社会関係は、タテ型の主従ないし支配・被支配関係と理解されてきたが、村社会のシステムとして問い直したとき、ヨコ型の協同関係と捉えることができる。同じ村の住民として、生産・生活の時間と空間を共

有する百姓同士が、政治力・経済力・文化力の格差に応じた役割分担をし、有機的に結合することで、村というシステムが強靱性を増したのである。また、社会経済状態に適合した資源配分を的確に判断し、百姓株や家格制、耕地所持・利用関係など村の内部構成・仕組みを自律的かつ自在に変えていく柔構造も村社会の大きな特質であった。

江戸時代の村社会は、百姓が必要とし、その永続を願ったからこそ存立したのである。百姓は、村というシステムを構築し、村の協同関係を維持し、江戸時代を通して村をつくりかえていった。そうした協同関係こそが、村社会の力量・生命力の源となったのである。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、下野国芳賀郡をフィールドにし、同地域に現存する旧家の村方文書の精力的な史料調査を踏まえ、綿密かつ確かな史料解読と現地調査によって、江戸時代の百姓が創りあげた村社会の生命力・活力を歴史具体的に解明した労作である。従来の研究史では、関東農村は江戸時代中期以降から農民層の貧窮分解と村の窮乏化が進行したといういわゆる「関東農村荒廃論」で論じられてきた。本論文ではその克服をめざし、村方文書の多面的な分析にもとづき、(1) 関東における主穀生産地帯の特質、(2) 耕地資源の活用とその主体、(3) 山と川からの商品生産、(4) 百姓の生業の多様と選択、(5) 協同組織としての前地主・前地関係、(6) 村方地主と小百姓の協同による村運営、(7) 土地慣行・百姓相続にみる村仕法、について言及している。いずれも村社会が自然的・経済的・社会的諸条件の変化に自律的に対応させていく柔構造のしくみを明らかにした。そして、江戸時代に形成された村社会が近代日本の基盤となる社会システムであることを指摘している。本論文の研究成果は近世史・経済史・社会史・農村史など多分野に継承されるべく内容を数多く含んでいる。また、同氏による将来の研究発展も期待できる。

本論文は膨大な村方文書を分析し、江戸時代の農村社会システムにかかわる新しい研究視角と新知見を提示しており、その内容は高い学術水準に達している。

よって、著者は博士（学術）の学位を受ける十分な資格を有するものと認める。